

日本語の国際化と沖縄の言語状況

東京外国語大学教授 井上 史雄

この稿では、日本語の国際化のあるべき姿について、言語政策としての理論的な問題を論じる。

日本国内で深刻な言語政策上の問題をもたらした沖縄の言語状況を、具体的な観察例として添える。

1. 国際化の四局面(国の内外と単語・言語使用)

言語の国際化についての言語政策は、(開発途上国などの)国民統一のための言語政策とは性格を異にする。日本においても新しい観点とあってよい。世界各地の言語政策の多くは、実は非国際化と結びついてきた。言語は国家や民族の統合のシンボルであり、ドーデの『最後の授業』に象徴されるように、帰属意識・アイデンティティーを変えさせるのに、有効な手段として働いた。

近代国家の成立と共に「国語・国家語・公用語」を定める必要が生じたが、多くの国家は単一の言語を国家内で用いることが理想とされた。マスメディア・教科書・行政文書を2種類用意し、議会で通訳するのは、経済効率にも関わる。またすでに成立していた国家でも、フランス・韓国のように、外国の単語や文字を排斥する動きが見られる。

日本語の国際化というときには、平等主義が背景になければいけない。上記のような排他主義があっては、理想的な国際化とはいえない。

国際化というと、様々な局面が問題になる。国の内外のどちらなのか、個々の言語要素が言語全体の使用なのかという二つの基準を組み合わせて、次の四つの局面に分類できる。

1. 国外への言語進出。
2. 国内での外国語使用の増加。
3. 外国語への自国語要素の進出。
4. 国内の言語体系への外国語要素の流入。

まず言語の総体としての使用における国際化を取り上げる。

1. 国外への進出は、ヨーロッパ主要国が以

前から心がけてきたことで、英独仏語などはそれぞれ言語教育・普及の機関を海外に作ってきた。言語の普及は文化的・心理的愛着をかきたて、国際的な影響力を強める手段でもあった。日本語は「大東亜戦争」当時から国際文化振興会などを作って遅ればせながらその動きを追ったが、活動の内容と地域は限られていた。最近では日本語学習者の増加、日本語を話せる知識人や労働者などの顕著な増加ぶりから、経済力を背景に、日本語が国際進出しつつあると、とらえられている。日本語の国際化というとき、この自信が背景になっていることが多い。

2. この逆に日本国内で日本語以外の言語が用いられることも多くなった。これは日本の言語的国際化とでも表現しうる。外国語使用の増加は現在世界各地でみられる。単語レベルでなく、言語体系として多言語化する状況である。外国人の多く出入りする場所で観察され、空港や観光地、集団的居留地が典型である。自国への単語レベルの外来語・借用語を避けるというフランスにおけるような反応は、言語体系内部の問題だが、こちらは言語使用の問題である。ここで一言語化・単一言語化することは、不可能に近い。一時的滞在者に過重な言語負担をかけることになるし、行政・マスコミ・教育で外国人への配慮をまったく行わないことは、人権の基本にかかわる。日本にいるからにはすべての人が日本語を使うべきだという主張は、現在ではできない。かつて日本帝国で植民地・占領地などで行ったのは、この乱暴な言語政策であった。国民としての一体感を急速に形成しようと目指したのだろう。現在も教育現場での外国語の対応について、努力が払われている。

最近の日本国内では、impersonal (institutional) bilingualismといわれるまでに、多言語化が進んだ。英語をトップとして外国語の表示・アナウンスが頻りに観察される。その地域・業種・場面なども拡大している。この傾向は多かれ少なかれ全世界に広がりつつある。現代世界で最大勢力を誇る英語を使っている諸

国でも、あちこちで英語以外の表示やアナウンスを観察できる。「世界言語地図」を描くときに、母語・家庭内の言語をプロットしてさえも分布が複雑であるが、場面別に調べた結果は一枚の地図には描ききれない。それほど言語間の相互進出が複雑化している。

言語の国際化においては、もっと別の動きが見られる。個々の言語的要素（多くは単語）レベルの借用現象である。

3. 外国語への自国語要素の進出は、端的には借用語の問題である。日本語中心に考えて、「外来語」に対する「外行語」と名付けられたことがある。言語間の借用は水のように高さから低さに流れると言われるが、日本語については相互的になりつつある。日本語の文化的地位が上昇したためとも見られるが、世界中の言語で国家の境界を越えた交流が盛んになりつつある傾向にもよる。

ある言語の特有語（他の言語に直訳できない意味分野の語）は、応々にして借用語として（訳語を与えられず、音訳のかたちで）他言語に受け入れられる。民族習慣や民族衣装などの語彙がそれにあたる。人名・地名などの固有名詞が典型である。日本語から英語への外行語は、多くの人が研究しているが、辞書に登録された語であれ、ジャーナリズムで注なして、しかもイタリックでもなく使われる語であれ、まだ今のところ特有語または新語である。ゲイシャ・フジヤマ・カミカゼの時代が終わっても、カロシ・ネマワシ・カラオケなどである。

現在の英語の外来語が、日本語（のみならずいくつかの言語）の在来の表現を置き換えるようなかたちで進出しているのと、レベルが違う。

4. 言語体系への外国語要素流入は、上の国際進出とはレベルも方向も違い、連動はしない。しかし、新たに近代国家に仲間入りした言語には必須の動きである。言語の近代化とは、その言語で近代科学・技術について伝達が行われ、行政やマスコミが運営されることをも意味する。その際、先発の近代国家ですでに用いられている専門用語について、同義・等価の訳語（または単なる外来語）が存在する必要が生じる。日本では明治期に大量の漢語の新語を作り、日本語での大学教育を可能にし、教育でもお雇い外国人への依存を脱した。漢語という言語材は日本語の外来要素と見なされないまでに同化した

ので、普通は「国際化」と見なされないが、新たに名付けられた意味分野という観点からみれば、ここで日本語は国際化したといつてよい。当時の世界では、国際化とはそのまま西欧化だったのである。音訳による外来語を使わないと外国語要素とみない傾向があるが、二重に非自国的である。まず漢語が本来のやまとことば（和語）でない点、また意味分野が従来の日本語にない西歐的な語彙に基づく点である。

以上、日本語の国際化の様相について、言語要素の借用、多言語化が進んでいることを指摘した。

2. 国際化と日本の言語政策

次にそれぞれについて、日本の言語政策が（どんなふうに行われてきたかを振り返ってみよう。日本の言語政策はこれまで主に日本語について、しかもその表記に限られていた。また民衆の組織的運動も目立たない。言語戦争のあった国々にくらべると単純である。

まず2の多言語化については、表だった反応はない。実質的コミュニケーションの必要に応じて行われることが多いからである。ただし、京成電鉄のホームで成田への客向けの英語アナウンスが流されることについて、満員電車の通勤サラリーマンがふざけて「おれたちには縁がないのに」と反応することはあるとか。また羽田空港への主要なアクセス機関である東京モノレールでは、完璧な日本語だけのモノリンガルで、成田からの乗換客、台湾との国際空港である点に配慮して、英語・中国語での表示やアナウンスがあるべきなのに、実現していない。通勤者向けの途中駅が増えて所要時間が多くなっていることもあり、モノレールは空港客向けのみではないという色彩を強めつつあるようだ。モノレールが唯一の例外で、商店・商店街・交通機関などで外国人向けの表示・アナウンスが着実に増えているところをみると、またわずらわしいというような投書がみられないことからいって、日本国内の多言語化は着実に進むだろう。各種行政機関でも窓口の多言語化が図られているくらいだから、この点に関して、逆行する言語政策が登場することはないだろう。

しかし、外国人労働者・残留孤児の流入や帰国子女の増加にともない、学齢期の子どもの多言語化が進んでおり、この点についてはむしろ

明確な言語政策のないことが、問題になりうる。日本語での授業についていけるような、同化政策が主体であり、外国語能力を保持させバイリンガルに育てようという方策はとられていない。オーストラリアでは多文化化・多言語化を進め、移民の言語を「言語資源」language resourceとして保持しようという動きがあるが、この観点は日本にまだ育っていない。ただし「ことばの経済学」の原理に従って、英語のような「経済力の高い(もうかる)言語」については、二言語の能力を保持しようという努力が払われることがあるが、家庭単位のもので、持続は困難なようである。これまで国内の朝鮮語(韓国語・コリア語・ハングル語)や中国語の話し手の言語能力を生かそうとしなかったのと、同根である。

一方1. 国外に日本語を広めようという動きは、公的な言語政策としてはとりにくい。むしろ受容国側の主体的な動きに応ずる形で行われる。海外への日本語教師派遣・日本語教師の国内での養成・再教育である。留学生の増加傾向に応じる政策がとられている。ただ一時的な滞在者、労働者への配慮はここに組み込まれず、サバイバルの日本語や「簡略日本語」の位置づけは不明瞭である。日本人の側にフォリナートークとしての分かりやすい日本語、一種のピジンとしての日本語が普及する事態は考えられない。

次に3と4の単語レベルの借用現象のうち、3の外行語については、まったく言語政策の対象とならない。受容言語側の問題だから。

4の、国内の日本語の中の外来語に関しては、言語政策の対象となりうるが、現実化していない。国語審議会は、ほぼ文字表記のみにかかわってきて、外来語の表記をいじって、以前より多くの外来語音を表記できるようにした程度である。新聞の投書などで時折り外来語乱用への憂慮が表明されるが、自分の親しくない分野での新しい外来語の増加について、ついていけないという意見が多く、すでに地位を確立した多くの外来語を排斥せよという極論は出てこない。また世論調査でも、外来語が多すぎるかどうかには世代差がいちじるしく、若い世代は抵抗感を持たない。新技術・新製品の登場のスピードが早まるにつれ、外来語の比率は増加しつつある。

話しことばで外来語が平板アクセントになりつつある現象(専門家アクセント)も、言語政策の対象とならない。平板化は日本語アクセントの長期的変化の一つだが、背景には外来語を自家葉籠中のものとして、目だたないアクセントで発音するという集団内の意識が働いている。

つまり日本語内の外来要素は、制度的にも個人の言語行動においても、まったく違和感なく用いられ、排外的な言語政策の対象とはなっていない。

戦後の国語政策の中で表記が大問題になり、ローマ字運動が高揚したが、皮肉なことに、ワープロの普及につれて機械的制約という論拠がうすれてしまった。ところがその動きと無関係に、「第2の言文一致・新言文一致」といわれる書きことばの口頭語化の流れの中で、若い人の書く文章には、外来語が多用され、さらにローマ字表記も多くなっている。ワープロの普及につれてローマ字表記体系にも変化がみられ、例えばオ段長音をouのように表すことが増えている。(母音の上に線を引く文字が不思議なことに)JIS規格で用意されていないこととも関係する。)雑誌名で横文字タイトルが着実に増えている現象をはじめ、商店・建物・商品などの表示をはじめ、アルファベットによる表記は着実に広がっている。日本語をすべてローマ字で表記すべきだという、制度を上から変えようという動きが沈静化するとともに、日本国内の表記にローマ字がじわじわと下の方から広がりつつある。表意(表語)文字/音節文字/音素文字は、この順に(習得の)初期投資が少なくてすむ。どれが効率的かは言語の文法的類型(孤立語・膠着語・屈折語など)とも関係する。しかし文化的背景をもとに音素文字の一つ、アルファベットは(従来の各地の文字体系と併用の形で)世界に広がりつつある。

3. 国内化と日本の言語政策

戦前の言語政策を考えると、国際化というよりはむしろ国内化のために言語政策が行われた。「大東亜戦争」当時の「国語」普及が典型である。朝鮮半島で使われた「国語札」が国内の「方言札」と、(名付は逆だが)同じ手法を用いたことに象徴されるように、国語普及は方言撲滅と同じ思想に基づいている。現在の日本領土内で過去の実態を調査しうるのは、沖縄や九州・

東北地方を典型とする方言撲滅運動と、北海道におけるアイヌへの日本語普及問題である。以下では沖縄県の実態をもとに、方言政策について考える。

4．沖縄の世代間コミュニケーション

沖縄県は日本のハワイだ……これが沖縄の第1印象だった。12月というのに暖かい風、熱帯樹、ハイビスカス。人々のカラフルな服装もハワイとそっくりに見えた。鉄道がなく、かわりにバスが走り回るのも似ている。そしてことばの面もよく似ている。

現在沖縄県では、老人は沖縄方言を話す、若者のことばはアクセントなどを除けば共通語そっくりである。そして中年は両方を使いこなす。ハワイで日系1世が日本語を使い、2世は日英語を使い分け、3世は英語専門になったのとそっくりだ。年寄りと子供はお互いに別のことばを使ってコミュニケーションを行い、分からないときには、中間世代が通訳として働く。ハワイでも沖縄でも、ことばは世代間では意識疎通の役割を果たしていない。本来コミュニケーションのための道具とされることばが、かえってコミュニケーションの障害になっている。

5．沖縄の共通語化と新方言

沖縄でこれほど急激に共通語化が進んだ背景には、戦前の学校での方言撲滅運動がある。ところが今回の沖縄調査で、悪名高い方言札が1970年代まで使われていたらしいことが分かった。

那覇市の南の佐敷町で話を聞いてみた。老人はいう。大正時代には方言札を使い、方言を使った生徒は掃除をやらされたとか。壮年層によると、方言札は昭和40年代まで使ったそうだ。集団就職が始まり、本土の人と意志を通じさせるために共通語普及を図り、方言を禁止すれば共通語がうまくなると考えたのだという。コミュニケーションの地理的範囲の拡大によって、方言だけでは間に合わなくなったわけである。その教育が効を奏したのか、今の中学生は沖縄方言がわからず、学校ではむしろ方言を使うように指導しているという。

沖縄県には地方出版物が多いが、その中の1冊に視聴者が寄せたファクスを収録したものがあつた(ラジオ沖縄編1994)。その中に方言札に

ふれたものがある。内容とともにことばも面白い。一部再録しよう。

《私の小さいころは……方言をつかいましたら『方言札』というゼッケンをかけられました。その『方言札』には大きな文字で『私は方言を使いました』と書いてありました。かけられたら恥ずかしいものがありましたので、早めに方言を使った人をさがさなければなりません。そのためよく使った手が、チョット相手の足を踏んだりして(シランフナーして)、その人が「アガー」といったら「方言使いよった」と言ってその札を渡していました。……》

問投詞アガーは沖縄に特徴的としてよく知られている。しかし「使いよった」のヨツタは、ここでは方言扱いされていない。昔話の文字化資料(老人が共通語で語ったのを文字化したもの)でもこの～ヨツタが出る。老人に同じ昔話を共通語で、次に方言で語ってもらったときも、共通語バージョンではこの～ヨツタが使われた。沖縄方言を共通語に直訳した形なのだろう。これは「地方(地域)共通語」である。

現在の沖縄の中学生のことばも、よく観察すると、いわゆる標準語と完全に一致するわけではない。自然会話と質問票による調査では、次のような表現が出た。

コユイとアワイ(味が濃いと薄い)、コンカッタ(来なかった)、イキヨル(行く)

生徒の作文などの分析結果の報告によると、語彙だけでなく、文法形式にも見られる。

生徒の方言使用意識の報告によると、「標準語を使っている」という答が多い。しかしその標準語は文章語とも東京付近の口語とも違う。沖縄の人も意識していて、「ウチナーヤマトグチ」(沖縄大和口)といっている。最近では若者が老人とは別の沖縄方言を使っている点も気づかれて、若者に特徴的な終助詞にちなんで「ダバーことば」ともいう。ダバーは「なのか?!」にあたる表現で、沖縄の子どもたちが「コレナンダバー」「コレ辞典ダバー」のように使う。驚きを含んだ表現という(まぶい組1989、野原1992:315)。「沖縄新方言」といってよい。

沖縄の県産品パンフレットでも、次のように指摘している。

《現代ではウチナーグチとヤマトグチをミックスした「ウチナーヤマトグチ」も多い。他の地方と同様、独自の方言が消えつつあることに

危機感が高まっているが、変容しながらも新しいウチナーグチが若者たちに根づいているようだ》

さすが地元の方は、ちゃんと現在の方言状況を把握している。

6. 新方言と共通語の全国的波及

これまで全国の老若の言語使用データを集め、方言と共通語がどのように変容しつつあるかを研究してきた。今回沖縄県に足を踏み入れて、この目で使用状況を確認することができた。

「新方言」が若者に普及しつつあるのは、沖縄県だけではない。全国からの報告がある。西日本の「行カンカット」、東日本の「イイベ」など。東京でさえもあちこちの方言を受け入れはじめている。ウザッタイ（不快だ）、違カット、ミタク、ジャン、チッタ（てしまった）などである。新方言は、東京を含め全国どこでも2桁はありそうだ（井上1985、1994）。

一方全国の若者に普及しているのは、文章に現れるような標準語・共通語だけではない。口語的なことばが広がっていて、これを東京語化・東京弁化と呼びうる。いわば底辺同士でことばをやりとりしているわけだ。

とはいえ、全体としてみれば共通語化の動きが大きい。沖縄は共通語化の一類型である。他地域はどうだろう。手元に日本全土の共通語使用度を示す資料がある。

国立国語研究所『日本言語地図』『方言文法全国地図』で老人の共通語形使用率を計算すると、地域差が大変大きい。ほぼ東京からの距離に反比例して、共通語使用率が落ちる。（本誌11月号の安平論文に方言使用意識の地方別データが載っているが、実際の使用は意識とほぼ一致する。）

ここ数年全国の中学に通信調査を実行している。「ことばの国勢調査」のボランティアをクラス単位で募集したようなものであり、現在データが集まりつつある。国内の地域差は少なくなっている。共通語形使用率の全国総平均でみると、語彙・文法ともにかつての老人は35%程度だったのが、今の中学生では80%以上に達する。

言語の変化は、人文現象一般と同じく、Sカーブを描いて普及する。現在は急激な共通語化が進んで、一段落した段階だろう。方言安定期

とも表現される。このあとは、ゆっくり、じわじわと共通語化完成に向かうようにみえる。

7. 中学生のトーキビとナスビの分布

しかし、個々のことばをみると、共通語化とも新方言ともつかぬ例がある。

まだ中学生のデータの間集計の段階だが、項目ごとに県別分布をみると、ほんの一部で老人の使っていた語形が残存しているのみで、方言形の使用者は激減している。ただし項目によっては方言差がまだ明瞭である。

図1「トーキビ」では、「とうもろこし」をさす言い方のうちの一つを取り上げた。トーキビという言い方は、『日本言語地図』の明治生まれの人では東北や九州などで広く使われていたが、今の中学生では衰えた。しかし北海道や熊本などではまだ盛んに使われている。

なお、共通語のトーモロコシという言い方は、『日本言語地図』によると明治生まれの人では東京付近の県でしか使われていなかったが、今の中学生では全国に広がっている。

ところがナスについては意外で、共通語形とはいえない「ナスビ」が、東に進出している。

図2「ナスビ」では、ナスビという言い方が西日本各県と北海道でよく使われている。また東日本の各県でも使用者がいる。（共通語のナスという言い方は全国で使われるから、東日本では両方を使うわけだ。しかし西日本にはナスビとしか言わない中学生もいる。）『日本言語地図』で明治生まれの人の全国分布を見ると、ナスビは東日本ではほとんど使われていない。この100年ほどのあいだに、ナスビが西日本から東日本に進出したことになる。ことわざで、「瓜のつるにナスビはならぬ」とはいうが、

ナス/ナスビが一例だが、ことばは幸いにしって一個人が二つ以上の言い方を使用したり理解したりできる。衣服のように場面によって使い分けうるのだ。書きことばが一番改まった場面で、服装でいえば礼服のようなものである。方言は普段着であって、書きことばとは最も縁遠い存在である。

8. 書きことばと方言の背反関係

ところが沖縄では、方言が街頭の広告や掲示などにも書かれる。方言のれんなどの方言みやげも多い。空港から街に入ると「めんそーれ」

の看板があり、方言を使った交通安全ポスターや広告がある。市場の食品にはサーターアンダギー・チキアギーはじめ特有の商品については方言で記してある（語源をさかのぼって「砂糖油揚げ・付け揚げ」と書くことはしない）。以上は方言であることを知っているの表示、つまり「意図的方言」だろう。しかし印鑑製造業者の「はんや」は（東京では言わないという）地域差を意識しないで表示したものだろう。「気づかない方言」である。

どうも我々は、文章語をはじめ、公に文字に記したものについては、方言差がないと思いきみがちだ。何しろ全国的コミュニケーションに使われるものだから。しかし鷗外・漱石などにも方言差が見られる。宮沢賢治の表現なども独創的とされていたが、岩手方言としてはあたりまえのものがある。「意図しない方言」は、文章にもみられる。

とはいえ、日本では、書きことばについては、見事に統一に近づいた。中世の候文以来書きことばの方言差は（ないわけではないが）非常に少ない。東北各地に、明治維新のときに官軍と謡曲で語りあったという伝承があるが、それ以前の、十返舎一九の『金草鞋』の冒頭では、登場人物が謡曲の調子で対話し、独り言は東北弁という設定が使われている。統一化された文章語を音声化する能力があれば、過去においても離れた地域の人々のコミュニケーションは可能だったのだろう。一方地域内の世代間の言語差は今よりも少なかっただろう。

9．沖縄の多言語状況

沖縄県は、英語と日本語との併用という点でも、言語的に複雑だった。戦後のアメリカ世(1-)には、英語の併用が本土より進んでいたとみられる。しかし変換以降は、アメリカ色・英語色を払拭する方向に動いたように観察される。観光客も多い国際通りでも、多言語表示の看板はそう多くない。むしろ沖縄方言を生かした看板などが目立つ。外国語がみられるとしたら英語が主で、台湾からの観光客が多いのに、中国語さえほとんどみられない。中国語を掲げているのは1店だけだった。ただし首里城とその周辺の交通案内や展示物説明は日英中の3カ国語だった。またアナウンスも日英中だった。博物館の説明なども日英の2言語表示が多い。これ

らについては、日本各地の観光地などでも起きている国際化といえる。

商業広告などの多言語化は、一般に都市化に正比例する（外国人労働者の数にも左右されるが）。那覇は都市化の割合には看板・宣伝などに多言語表示が少ない。本土の県庁所在地ではもう少しローマ字の商店名が多い感じがする。アメリカ支配から脱して、本土化が行きすぎたのだろうか。

短期間の滞在で小地域しか観察していない。沖縄市（旧コザ）は、少しは昔の面影を残していたかもしれない。多くの都市を比較対照できるような客観的計測方法（従来と別の意味での言語地理学）を開発した上で、またの観察・報告を待ちたい。

10．ことばと地域差から世代差へ

こうしてみると、今沖縄で世代間のコミュニケーションが困難になっているのは、過去にはなかった新状況といってよい。

近代以前に、地域間のコミュニケーションが少なかったから方言差が発達した。しかし近代以降、地域間のコミュニケーションが盛んになるにつれ、方言は障害物扱いされ、標準語・共通語の普及が図られた。

共通語化が進む以前は、地域差が圧倒的に大きく、方言の単語や発音・文法の違いで誤解を起こすこともあった。しかし沖縄の中学生にとって、同じ地域の老人とのコミュニケーションは困難であっても、東京や青森の若者とのコミュニケーションに苦労はない。ことばによる世代の断絶である。

世代間コミュニケーションの隔絶は、実は日本全国で他の面でも起きている。老人は、若者の流行、機械などの専門語の入った会話についていけない。現代社会ではことばの地域差より世代差の方が大きくなっている。

11．情報の受動と能動

さて以上を踏まえて、ことばの差がコミュニケーションにどんな意味を持つかを考えよう。

情報の能率的伝達にはことばの差はない方がいい。プログラム言語に国内の地域差があっては困る。もっとも言語能力には、能動と受動、使用と理解の違いがあり、普通、受動的理解の能力の方が大きい。能動的使用としては1種の

表現しか持たなくとも、受動的な理解としてありうる多くの形を知っていれば、ことばの差があってもコミュニケーションは可能である。方言と共通語双方の理解能力を養うのが望ましい。

異言語間についても同様である。多くの国民がバイリンガルに近い言語能力を身につければ、今後国家間の交流が盛んになった事態に対応できるし、外国およびその文化への理解も増えるだろう。

ちょうど、人間にやさしい情報機器を実現するなら、人間の側で (END FINISH QUIT OWARI OSIMAI など) 様々なことばで命令を出しても、機械の側で一様に理解するものが便利であるように。

謝辞

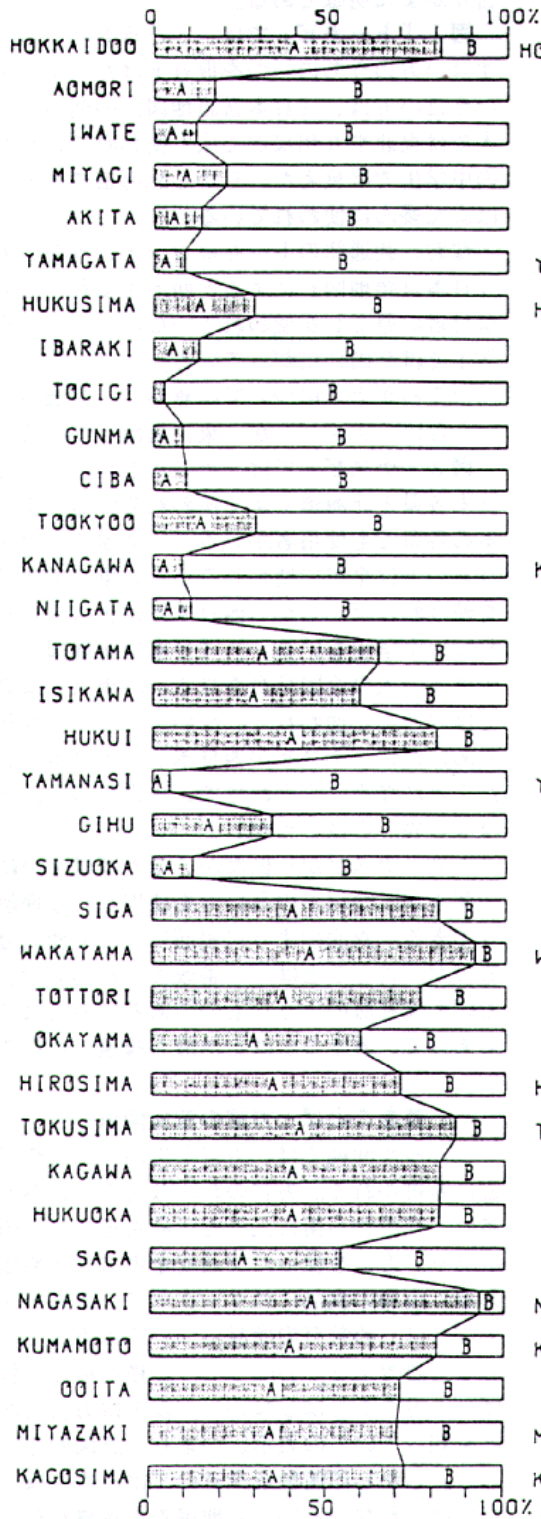
大部のアンケートにご協力いただいた全国各地の中学生と父母、先生方に心から感謝申し上げます。データ集計には荻野綱男氏開発のGLAPSを東京外国語大学AA研電算室で使った。また沖縄県佐敷町の教育委員会およびことばを教えて下さった方々に深く御礼申し上げます。調査は科学研究費「日本語教育の社会言語学的基盤」(井上史雄代表)および「国際社会における日本語についての総合的研究」(水谷修代表)による。なお引用文献リストは紙数の関係で簡略化した。

文献

井上史雄(1985)『新しい日本語』(明治書院)
井上史雄(1994)『方言学の新天地』(明治書院)
野原三義(1992)『うちなあぐち考』(沖縄タイムス社)
まぶい組(1989)『おきなわキーワードコラムブック』(沖縄出版)
ラジオ沖縄「前田すえこのいいことありそうウィークエンド」編(1994)『笑う!うちなあぐちFAX小全』ポーターインク

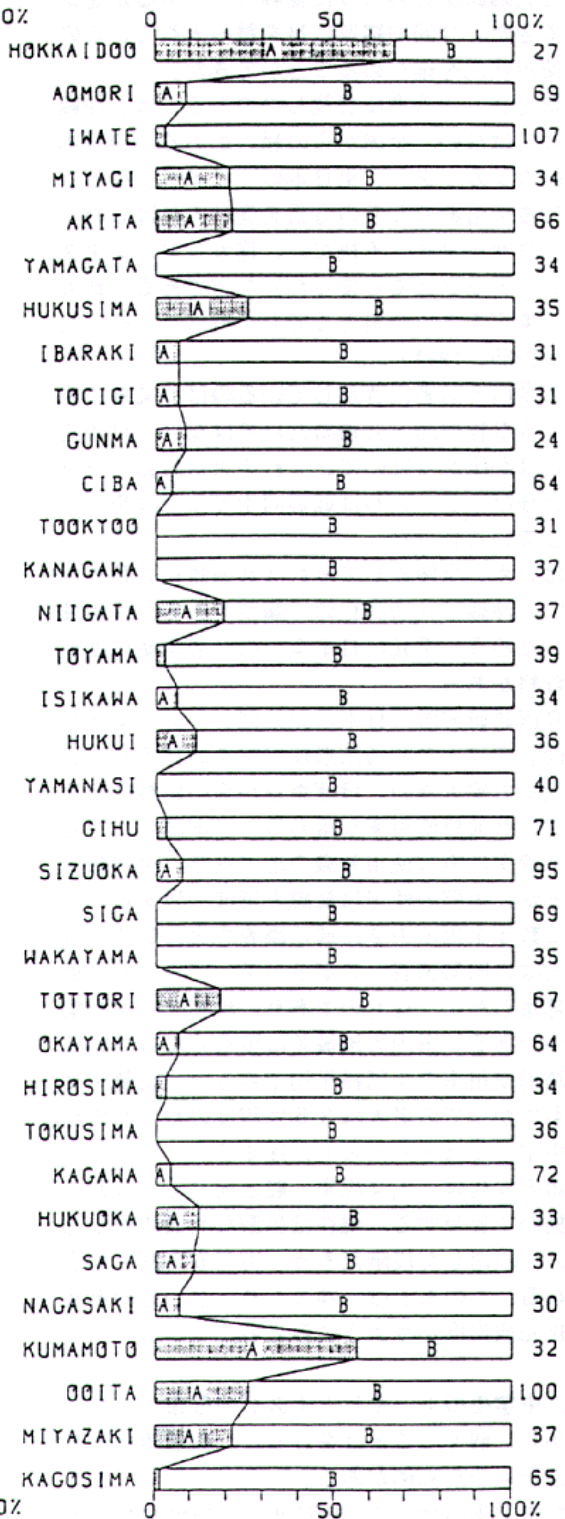
(いのうえ ふみお・東京外国語大学教授)

図2 「ナスビ」



A = TSUKAU
B = TSUKAWANAI

図1 「トキビ」



A = TSUKAU
B = TSUKAWANAI